

[招待：実践報告]

朝鮮語を学び、使い、 朝鮮語で世界を見るということ

SFC 朝鮮語研究室の教育実践を例に

Learning and Using Korean, Then Viewing the World through the Lens of It

An Example of Educational Practice at Keio SFC Korean
Section

高木 丈也

慶應義塾大学総合政策学部専任講師

Takeya Takagi

Assistant Professor, Faculty of Policy Management, Keio
University

柳町 功

慶應義塾大学総合政策学部教授

Isao Yanagimachi

Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Correspondence to: iyanagi@sfc.keio.ac.jp

徐 旻廷

慶應義塾大学総合政策学部訪問講師

Minjung Seo

Visiting Lecturer, Faculty of Policy Management, Keio University

Abstract:

本稿は SFC 朝鮮語研究室が実践している教育について海外研修、特別研究プロジェクト、講演会、電子教材開発、学術活動という観点から報告するものである。一連の事例報告を通して、言語を学ぶという営為そのものが、単に言語習得という枠組みを超えて、人間関係の構築や情報収集、「現場」という最前線へのアクセスのために必要な方法を総体的に学ぶ場となっていることを示す。

This paper reports on the education practiced by the SFC Korean Section in terms of overseas language programs, special research projects, lecture sessions, development of electronic learning materials and academic activities. Through a series of case reports, the article attempts to show that the activity of language learning itself goes beyond the stage of language acquisition. Rather, it is a place of total learning of building relationships, gathering information and gaining access to the front line, the reality.

Keywords:

朝鮮語教育、コリアン・スタディーズ、フィールドワーク、現場

Korean language education, Korean studies, fieldwork, field

1. はじめに

外国語大学や外国語学部でもないのに朝鮮語を週4コマ学び、1年の学習と海外研修によって「使える朝鮮語」を身につける——これは我々 SFC 朝鮮語研究室が毎学期初めに学生たちに語ってきたメッセージの一部である。二泊三日のソウル観光旅行に行くだけならば SFC での学びは不要である、も同様である。

SFC で朝鮮語を学ぶ目的は、基礎的な言語能力を習得し、問題意識に従った地域研究を実践していくためのツール(道具)として実践力を身につけていくところにある。そのためには週4コマ(インテンシブ)や週2コマ(ベーシック)の学びは欠かせない。自らの力で「現場」に出かけ、フィールド調査を実践することで見えてくる世界は広く、深い。このエキサイティングな思いに一人でも多くの学生を誘導したい、というのが我々教員の思いである。常に我々自身が手本となって、我々の試行錯誤の様子を学生たちに見せ、しっかりと感じ取ってもらうことが我々の務めではないだろうか。

そうした思いの実現のため、言うまでもなく我々は、ハイクオリティーのコンテンツを準備している。そのコンテンツはすべて我々の「手作り」である。もちろん満足できるレベルには至っていない。高い問題意識と言語能力を持った学生を丁寧に作っていきたいという思いは、休むことなく今後も継続していかなければならない。以下、我々 SFC 朝鮮語研究室の具体的な取り組みを紹介していきたい。

2. 教育実践

本章では、第1章で述べた SFC 朝鮮語研究室の教育理念に基づいた教育実践、およびその効果について述べる。具体的には①海外研修、②特別研究プロジェクト、③講演会、④電子教材開発、⑤学術活動の順に取り上げる。

2.1 海外研修

インテンシブ2を修了すると、夏季・春季休暇中に韓国・ソウルで行われる海外研修に参加する資格が得られる。2023年度まではソウル大学校 言語教育院(서울대학교 언어교육원)で実施してきたが、2024年度からは漢陽大学校 国際教育院(한양대학교 국제교육원)で実施している。この海外研修は、いずれも SFC の学生向けに開発されたオリジナルプログラムであり、毎学期、SFC 朝鮮語研究室の専任教員と現地機関の教職員による綿密な準備、連携のもとに行われる。当研修の特徴は、単に座学の言語研修を行うにとどまらず、SFC のインテンシブコースで学んだ言語知識をもとに、より能動的、かつアカデミックな言語活動(探究)を多く行うという点に集約される。学生は3週間(計

92時間)の研修を受け、所定の要件を満たした場合、4単位が認定されることになる。ここでは、この研修における取り組みを授業、フィールドワーク、見学といった観点から紹介しよう。

2.1.1 授業

研修期間中、平日の午前中は教室における言語研修が行われる。クラスは初級(TOPIK＝韓国語能力試験3級相当)と中級(TOPIK4級相当)の2コースを設置しており、クラス分けはインテンシブ2における到達度や、研修先教員による事前のレベルチェックの結果を総合的に考慮して行われる。各クラスではメインテキストが1冊指定されるが、当研修ではテキストを用いた授業と並行して、独自のアウトプット活動が豊富に行われる点特徴的である。例えば、これまでに下記のような授業内活動を行ったことがある。

(1)デリバリー注文体験

コロナ禍以前からデリバリー文化が広く浸透している韓国社会を体験する取り組みの一つとして、実際に飲食店に電話をかけ、ピザやチキン、韓国料理の注文を行う体験を行っている。料理名はもちろん、数詞・助数詞の使い分けや配達先の説明など、基礎的な言語能力の確認にも役立つ活動である。なお、この活動は研修の比較的早い段階で行われる。教員のサポートのもとで自ら注文をする体験をすることで、何かを頼んだり、尋ねたりすることに自信が付き、以降の研修期間においても自律的な言語使用をすることが可能になるようだ(一般に実際の注文場面では、言語面での叱正を受ける機会が多くない。そのため、誤用の化石化を防ぐという効果も期待できる)。

(2)プレゼンテーション

韓国社会における独自のフィールドワーク(2.1.2参照)の結果をパワーポイントにまとめ、朝鮮語でプレゼンテーションをする。発表原稿の作成・推敲からプレゼン(発音)練習までの一連の過程を、研修先の教員や現地大学生のサポートのもと繰り返し行う。この作業を通してアカデミックレベルにおける発信型の朝鮮語能力の向上を図る。見たこと、感じたこと、考えたことを自分の言葉で正確に伝えることは、以降の学生生活、社会生活の中でも必要なスキルとなる。なお、SFCの学生の興味・関心事項は極めて多様であるため、作成するパワーポイントは、朝鮮語と日本語のバイリンガル表記にすることを推奨している。そうすることで、発表を聞く際もクラスの学生の関心事項について理解を深め、語彙力の増強を図ることが可能になる。なお、成果物の一次的な発表は、まず授業内で行い、教員

の講評を受ける。さらに優秀な学生・グループには、最終日の修了式の際に全体での発表の機会が与えられる。

(3)文化体験

授業の一環として複数の文化体験が用意される。体験型のものが多く、これまでに韓国料理の調理体験、韓服(朝鮮の伝統衣装)の試着体験、テコンドー体験などを行った。当然のことながら学生は、すべての説明を朝鮮語で受けることになるため、言語と文化の関係を意識するよい契機となる。例えば、2024年夏の研修では伝統餅作り(전통 떡만들기)体験を行った(図1)。餅職人から韓国における餅の歴史・文化について説明を受けたあと、実際に餅作りを行い、最後にはそれを直接味わうことで、韓国人の生活と餅の関係について理解を深めることができた(餅の模様一つ一つに込められた意味、願い、食べ方など、奥深い世界について学ぶことができた)。このように朝鮮語を媒介としつつ、五感をフルにして行う活動は、教科書では決して学ぶことができない朝鮮文化の体得に繋がるものである。



図1 伝統餅作り体験(2024年8月)

(4)見学

「現場主義」の観点から韓国の社会・歴史を学べる様々な場所に見学に行く機会を用意している。2024年夏の研修では、北朝鮮との国境に近い非武装地帯(DMZ)を見学し、朝鮮戦争をめぐる歴史や停戦状態にある南北関係の現状について理解を深めた(図2)。また、6・25戦争[朝鮮戦争]拉北者記念館(6.25 전쟁 납북자 기념관)を訪問し、拉北者(北朝鮮により拉致された人々)に関する記録も確認した。共著者の徐曼廷は普段、朝鮮語を教えながら、学生の北朝鮮に対する心理的距離が(韓国と同じ言語圏であるにもかかわらず)非常に遠いことを痛感してきたが、今回、非武装地帯がソウルからわずか1時間ほどの距離に位置することすら知らない学生が多いことに改めて驚いた。日本の義務教育課程で朝鮮戦争について扱われる内容が限定的であること、日本語資料により得られる情報が極端に少ないことと無関係ではないだろう。今回実際に「現場」を訪問することで、戦争の経緯、傷痕、平和の意味などについて改め

て調べ、考える契機を提供することができた。こうした経験は朝鮮語を学んだからこそ得られる財産である。なお、見学の実施前には柳町功による南北分断に関する特別講義が実施され、見学をより効果的に行うためのプレインストーミングを行った。



図2 非武装地帯 (DMZ) 見学。
後方は臨津江 (イムジンガン)。 (2024年8月)

上記以外にも当研修では、韓国の童話をもとにした創作劇の発表や、研修の思い出をまとめた動画作成といったユニークな活動が行われ、アウトプット、発信の機会が多く確保されている。こうした活動は言語教育という面で有用であるばかりか、朝鮮語圏を構成する様々な事象、社会的側面にアプローチするという意味でも極めて重要な意味を持つ。

2.1.2 フィールドワーク

当研修で学生は、午前中は教室における言語研修を行うが、午後は各学生が独自に設定した調査計画に基づいたフィールドワークを行う。フィールドワークにかかる活動は研修期間中に21時間以上行うことを定めており、研修先の教員が募集・採用した現地大学生 (チューター) との協同により行う。現地大学生からは、言語面はもちろん調査・分析の過程でも適切なサポートを受けることができるので、より現地の実情に合ったフィールドワークを行うことが可能になっている。2023、2024年度に参加した学生のテーマの一例を示すと、下記のとおりである。

- 「韓国美容市場における男性用化粧品消費傾向」
- 「韓国のインスタント食品の文化について」
- 「観光としての韓屋の利用」
- 「韓国のゴミの分別状況、日本との違い」
- 「ソウル市内における外国語の使用状況」
- 「韓国社会 (会社や家族内) における女性の社会的地位」

- 「西大門刑務所歴史館での日本統治時代の歴史の語られ方」
- 「韓国の街におけるユニバーサルデザイン」
- 「韓国のポップカルチャーがツーリズムに与える影響について」
- 「韓国ソウル地域の街頭広告におけるコピーの表現・ターゲット分析と日本との比較」
- 「東京とソウルにおける駅内広告の比較と考察」
- 「詩歌が韓国においていかに身近か」
- 「韓国での野球観戦文化」
- 「韓国のグラフィックデザインやプロダクトデザインについて」

これらのテーマを見てわかるように学生のテーマは衣食住といった生活に密着したものから、社会、歴史、文化、デザインまで多岐にわたる。学生は日本出国前にフィールドワークのテーマ、方法論を朝鮮語研究室の専任教員に報告し、調査実現性を考慮したうえで必要に応じて修正を繰り返す。また、フィールドワーク前には先行研究や関連データの読み込みを丁寧に行うとともに、韓国に滞在中、最低1回は引率教員との面談を受け、指導を受ける。さらに帰国後には小グループでの輪読を経て、5,000字程度のレポートを提出する (クラスメイト数人のレポートを相互に読み、コメントをし合う過程で学生は新たな視点を獲得することができる)。このように我々は、単なる観光や見学にとどまることなく、真にアカデミックなレベルでのフィールドワークを志向すべく心を砕いている。

なお、2023年度までは、研修に参加する学生を3～5名の小グループに分け、グループごとに1名の現地大学生をチューターとして配置していたが、2024年度からは完全に1:1による担当制に変更した。そのため、より個別の興味・関心に応じたフィールドワークの実施が可能になった。母語や国籍は違えども年齢の近い大学生との交流は、研修生活を豊かにしてくれるものであり、ソウル滞在中、フィールドワーク以外の時間も行動を共にするケースが多く見られた。それだけに留まらず帰国後に連絡を取り合うグループ・ペアも少なくないという。こうした草の根の交流を支援できるのも当研修の特徴の一つである。

なお、SFCの海外研修については、2023年春の研修の際、韓国の英語ニュースチャンネルである Arirang NEWS から取材を受け、映像として配信されたことがある (図3)。配信された内容は下記のURL (YouTube アーカイブ) で視聴可能である。

https://www.youtube.com/watch?time_continue=1263&v=E-iu-KX80fk



More and more foreign students learning Korean for K-pop, K-drama, and movies

図3 Arirang NEWSでSFCの朝鮮語海外研修が紹介された
(2023年2月21日、YouTubeより)

2.1.3 見学

韓国財閥研究が専門の柳町功のアイデアで、研修時には企業訪問を行ってきた。日本でも有名なロッテグループ本社を訪問し、人材教育の実際をヒアリングし、創業者の記念館を訪問した(図4)。また韓国を代表する化粧品メーカー・アモレパシフィックの訪問・ヒアリングを行ったこともある。



図4 ロッテ本社・辛格浩記念館(2022年8月)

また、2024年夏には日韓外交の最前線である在韓日本大使館を訪問し、水鳥大使との懇談の時間を持つことができた(図5)。SFC卒業生で、現在日本大使館で活躍する山後参事官のサポートを受け実現できたが、朝鮮語を学ぶ思いを新たにする貴重な体験の場となった。



図5 在韓日本大使館訪問(2024年8月)

2.2 特別研究プロジェクト

SFCには春学期、秋学期の授業のほかに春季・夏季休暇中に実施される「特別研究プロジェクト」(通称、特プロ)という科目がある。これは慶應義塾大学(2024)で「研究会を担当している教員による、学期中ではできないような研究を夏季・春季休校期間中に集中して行う科目」(p.20)と説明されるもので、朝鮮語研究室でも下記のように開講してきた¹⁾。

(1) 2021年春学期

特別研究プロジェクトB(コリアン・スタディーズ入門)
高木丈也、柳町功、高在弼

(2) 2021年秋学期

特別研究プロジェクトB(コリアン・スタディーズ入門2)
高木丈也、柳町功、高在弼

(3) 2021年秋学期

特別研究プロジェクトB(コリアン・スタディーズ発展1)
高木丈也、柳町功、高在弼

(4) 2022年春学期

特別研究プロジェクトB(コリアン・スタディーズ入門3)
柳町功、高在弼

(5) 2022年秋学期

特別研究プロジェクトB(コリアン・スタディーズ入門4)
柳町功、高在弼、高木丈也

(6) 2023 年春学期

特別研究プロジェクト B (コリアン・スタディーズ入門5)
柳町功、高在弼、高木丈也

(7) 2024 年春学期

特別研究プロジェクト A (コリアン・スタディーズ フィールド編 1)
高木丈也

朝鮮語研究室における特別研究プロジェクトは、新型コロナウイルスの拡散を受け、海外研修やフィールドワークが思うように行えなかった 2021 年度に「学生のコリアン・スタディーズの学びを止めない」ことを目的に企画されたことに端を発する。このような事情から (1)～(6) は主にオンラインによる実施を中心としてきたが、新型コロナウイルスの影響が相対的に弱まった 2024 年 3 月には初めて、ソウル (韓国首都圏) での実施に踏み切った (上記 (7))。ここでは、その「コリアン・スタディーズ フィールド編 1」について述べることにする。

2.2.1 概要

当プロジェクトは、2.1.2 で述べた海外研修におけるフィールドワークをさらに発展させ、朝鮮語圏の社会・文化をより主体的かつ緻密に探究することを目的としたものである。全体はおおよそ (1) 事前準備・計画立案、(2) 現地フィールドワーク、(3) 分析・発表という 3 つの段階から構成され、日本と韓国で計 46.5 時間の活動を経て、所定の要件を満たした場合に 4 単位が認定される。3 つの段階の概要は、表 1 のようになる。

表 1 特別研究プロジェクト (コリアン・スタディーズ フィールド編 1) の段階別概要

時期	実施国	時間数	活動内容
前半	日本	4.5 時間×3 日 = 13.5 時間	フィールドワークに向けた事前準備 (先行研究の検討、リサーチクエスションの設定)、調査計画立案
中盤	韓国	7.0 時間×4 日 = 28.0 時間	ソウル (韓国首都圏) におけるフィールドワークの実施と考察・分析 (グループフィールドワーク+全体フィールドワーク)
後半	日本	5.0 時間×1 日 = 5.0 時間	考察・分析、発表・討論、ふりかえり

当プロジェクトには 11 名の学生が参加した。実施するにあたり、メンターである高木丈也が学生に提示した当プロジェクトの目標は、下記のとおりであった。

- ・日韓、あるいは第三国で発表された文献の中から必要なものを適切に取捨選択し、その内容を正確、かつ深層的に理解する。
- ・独自のリサーチクエスション、フィールドワークを設計したうえで、実際に自ら「歩き、見て、聞く」。
- ・フィールドワークの結果を適切に整理し、議論するとともに、最終的には自己の言葉で正確にまとめる。

このように当プロジェクトは、リサーチクエスションの設定から調査計画の設計、調査そのものの遂行に至るまでをすべて学生たちのみで主体的に行うという点が特徴的であり、これは 2.1.2 で述べた海外研修におけるフィールドワークとは差別化される部分でもある (教員はメンターとして、意見を求められた際に必要な助言を行うほか、渡航前に調査・研究計画を精査し、実現可能性を判断する。また、現地滞在中も随時、帯同あるいは連絡ができる体制を取り、適切なサポートを行う)。

事前準備の段階でフィールドワークの作法については佐藤 (2002)、菅原編 (2006)、新原編 (2022) などを、韓国社会におけるフィールドワークについては大瀬 (2022)、平田・山中 (2019)、吉村 (2021) などを紹介し、必要に応じて参照するように学生に伝えた。一連の準備過程では対象とする社会 (コミュニティ)・文化・歴史に対する正確な理解、地理感覚の涵養、現地調査の可否に対する確認など求められる事項が少なくないが、自らの手による綿密な準備に基づいたフィールドワークが、その後の調査の質を高めてくれることは言うまでもない。また、それ以外にもグループでの文献・資料輪読や議論を行う過程で多くの気づきや学びを誘発することがあり、ここに個人フィールドワークとは異なった魅力があるということが出来る。

2.2.2 フィールドワーク

本節では、実際に学生らがどのようなフィールドワークを行ったかを紹介する (ただし、紙幅、および著作権の関係上、ここでは概要の提示に留める)。まずはグループで行ったフィールドワークとしては、下記の 3 つをあげる。

(1) 冷麺グループ

韓国料理の代表選手、冷麺。朝鮮半島の北部が発祥であるとされるが、どのようにして韓国に入ってきたのか。そして、それは時代を経て、韓国国内でどのように継承され、変容してきたのか。食文化関連の博物館や多様な冷麺店を訪問するほか、越南者 (北朝鮮からの移住者) の飲食店も訪問し、冷麺の「今」を調査する。

(2)誤表記グループ

海外の観光地では看板や標識の誤表記をよく見かけるが、韓国の場合はどうなのだろうか。実際に街を歩いてどのような場所に、どのような誤表記があるのかを調査したうえで、なぜそうした表記が生じるのか(生じないのか)を考察する。また、観光客へのインタビューを通して、具体的に不便な点はなかったかを調査し、改善への方策を探る。

(3)屋台グループ

韓国といえば屋台をイメージする人が多い。活気あふれる市場に立ち並ぶ屋台は地元の人々の生活の場として重要な位置を占める。しかし、大型店舗やチェーン店の台頭により市場・屋台の危機が叫ばれて久しい。これを克服するためにどのような施策を講じているのかを屋台訪問や運営者へのインタビューから解明する。さらには「インバウンド」との関係も探る。

いずれのグループの学生もこれまでに学んだ朝鮮語やすでに構築した人脈を最大限に駆使して、懸命にソウルの街でフィールドワークに臨む姿が印象的であった。実際には予想以上に時間がかかったり、調査地点の変更が生じ、計画を調整することもあったが、そうしたトラブルですら臨機応変に乗り越え、最終発表会では(インターネット情報などの受け売りではない)独自の調査に基づいた独創性のある考察を展開することができた。試行錯誤を重ねながらもこうした「現場」での経験を多く積むことで主体的な言語使用者としての力量が増すことはもちろん、「非朝鮮語話者」として朝鮮語圏といかに関わるかという重要な視座も自然に身につけることが可能になると期待される。

また、全体フィールドワークでは、ソウルにある西大門刑務所歴史館(서대문형무소역사관)や大韓民国歴史博物館(대한민국역사박물관)を見学したほか、京畿道安山市にある外国人住民支援本部(외국인주민지원본부)・多文化家族支援センター(다문화가족지원센터)を訪問した(図6)。安山市では、職員から朝鮮語で同市の多文化共生事業に関する説明を受けたのち、やはりすべて朝鮮語で移住者政策に関する意見交換が行われた(先方に日本語を解する職員が1人もいなかったことが、参加学生がより熱心に参加する要因となっていたかもしれない)(図7)。さらに安山市議会を表敬訪問する機会にも恵まれ、議会見学後は議長との意見交換の場が設定され、そこでも活発な意見交換がなされた。インテンシブ2を修了したばかりの学生には、言語面でやや難しい部分もあったと思われるが、事前に現地事情についての学習機会を設けていたこと、グループごとに質問を用意していたこと、メンターの高木丈也と朝鮮語に熟達した

学生が適切に通訳を行ったことにより、大卒の理解には問題がなかったと考える。こうした現地機関との協力のもとに行われるフィールドワークは、綿密な事前準備が必要となるが、その分、参加者の満足度は総じて高かった。



図6 フィールドワークの途中で(2024年3月)



図7 安山市外国人住民支援本部での意見交換会(2024年3月)

2.3 講演会

朝鮮語研究室では、キャンパス内においても朝鮮語圏をアカデミックなレベルで理解するための機会を提供してきた。その一つがここで取り上げる講演会である。講演会の実施にあたっては、朝鮮語科目の履修者や研究会所属の学生、興味関心のある学生に広く呼びかけるようにしており、学部生のうちから最先端の学術研究や社会の動向にふれることで、言語学習の先に広がる地域研究の世界に自然と目を向けられるよう配慮してきた。この数年に行った代表的な講演の例は、次ページの表2のとおりである。

これを見ると、学界を牽引する著名な研究者だけではなく、大学院生や卒業生も積極的に招聘していることがわかるだろう。年齢も近い彼らは、学部生にとって一種のロールモデルとしての役割も果たしており、身に付けた言語をいかに用いて研究や実務にあたっていくかを考える絶好の機会となっている。

表2 朝鮮語研究室が主催した講演会の例
(所属・肩書は発表時のもの)

実施年度	講演題目	講演者(所属・肩書)
2019年度	「ハングルとレオナルドダヴィンチ」	金星奎氏(ソウル大学 国語国文科教授)
2020年度	「言語と地域研究ー 日本研究者である私と日本語ー」	金顕哲氏(ソウル大学 国際大学院教授 日本研究所所長)
2021年度	「韓国の中高における第2外国語教育に関する考察」	徐銀永氏(慶應義塾大学 政策・メディア研究科 博士課程) *大学院生
2021年度	「戦後日韓関係と企業家研究-私のコリアン・スタディーズ」	柳町聡氏(慶應義塾大学 政策・メディア研究科 博士課程) *大学院生
2022年度	「韓国企業で働くということ」	大庭梨和氏(三養ジャパン事業推進グループ・マーケティングチーム) *卒業生
2023年度	「在日コリアン民族 学校生徒の言語使用」	生越直樹氏(東京大学 総合文化研究科 名誉教授)

なお、朝鮮語研究室ではこのほかにも映画鑑賞会や料理体験教室を開催し、様々な視点から朝鮮語圏について考え、体験できる機会を創出してきた。例えば、2024年5月に実施した映画鑑賞会では、朝鮮語科目を履修する学生に興味・関心のある映画について事前調査を行ったうえで、朝鮮戦争の悲劇を描いた韓国映画「ブラザーフード」(태극기 휘날리며, 2004年)を上映することを決定した。当日の鑑賞会は、下記のような流れで実施した。

(1)ブレインストーミング

映画を見る前に韓国軍での服務経験のある留学生(SFCの学生)を招き、軍生活に関する話を聞き、質疑応答を行った。また、そのあとで大学院生が中心となって、朝鮮戦争の歴史的背景に関する簡単な説明を行った。

(2)映画鑑賞

軽食やジュースを提供し、自由な雰囲気の中で鑑賞できるように配慮した。

(3)ディスカッション

学生達を中心となって、映画の感想や朝鮮戦争をめぐる諸問題について意見交換をする時間を持った(図8)。

質疑応答や意見交換の時間には、いずれも活発な議論が展開された。参加した学生からは「授業で習った朝鮮語が聞き取れた時は、とても嬉しかった」、「ディスカッションを行ったことで南北分断の状況について、これまででない視点で考えることができた」といった意見が得られた。朝

鮮語研究室では、こうした映画鑑賞会を今後も学期ごとに開催し、言語を学ぶ楽しさを提供しつつも朝鮮語圏への深層的理解を促進していきたいと考えている。



図8 映画鑑賞会 ディスカッション(2024年5月)

2.4 電子教材開発

SFC 朝鮮語研究室では、朝鮮語を学ぶ機会に加えて、アカデミックレベルにおける知識の涵養を図る努力を重ねているが、その中では「教員=教育者」、「学生=学習者」という旧来の構図を必ずしも踏襲することのない新たな試みも行われてきた。その一つがここで取り上げる電子教材開発である。SFCの授業で朝鮮語を学んできた学習者としての視点を生かしつつ、同時代の若者の感覚をも取り入れた教材の開発は、まさに福沢諭吉先生の「半学半教」の精神を体現したものであり、その成果物は後輩となる学生たちにとっても魅力的なコンテンツとなることは間違いない。以下では、2022年度に学術交流支援資金(外国語電子教材作成支援)の採択を受け、筆者らが行った電子教材の概要を高木ら(2023)をもとに紹介する。

・作成意図

インテンシブ1、ベーシック1・2のメインテキストである高木・金泰仁(2020)『ハングル ハングル I』(第9課～第25課)で学んだ単語・文法・表現をソウルの街で撮影した会話で実践練習できるショート動画教材を作成する。計31に及ぶ多様な場面におけるやりとりを見ることで、ことばに宿る臨場感を感じ、文字として学んだ言語情報を「どのように使えるのか」を体得することを狙う。

・内容と特徴

各動画では、まず自然な会話のやりとり(和訳字幕あり)が1回、それに続いてややスローなスピードでの発音練習(和訳字幕なし)が1回流れる。未習の語彙、表現には字幕を付してあるため、リアルさを追求しながらも学習段階に合った学習支援が可能になる。また、全体の長さは1分以内のショート動画であるため、負担なく繰り返し視聴する

ことができる(いわゆる「縦動画」であり、スマートフォンでの視聴にも適している)。

・作成過程

[2022年4月～10月]

教員、教材作成協力者とのオンラインミーティングを複数回実施し、方向性、年度計画、担当を策定。特に学習者へのニーズ調査、(言語を問わず)類似サイトの調査を複数回、実施。

[2022年10月～11月]

スクリプトの作成と数度にわたる検討。撮影スケジュール・撮影地・出演者の決定。ソウル大学 言語教育院への協力依頼。

[2022年11月]

ソウル市内(ソウル大学 言語教育院、鐘路、益善洞、漢江公園など)で台本練習・撮影。

[2022年12月～2023年2月]

動画編集。ハングル字幕挿入作業。アップロード。

当プロジェクトは教員と朝鮮語研究室のSA(Student Assistant)、研究会所属の学生の協同のもとに行われた。習う側と教える側を区分しない教材作成の展開は、教員・学生双方が言語(学習)を問い直す契機となったばかりか、実際に授業でも使用できるため、後学の学習環境の改善にも役に立つものとなっている。

なお、当プロジェクトの成果物は、下記のサイトで閲覧が可能である。

<https://www.youtube.com/@sfc1315/shorts>

2.5 学術活動

言語コミュニケーション科目、および2.1から2.4まで述べた各種の活動の集大成として研究会(ゼミ)における学術活動がある。ここでは、学部研究会、大学院研究会の2つに分けて述べる。

2.5.1 学部研究会

朝鮮語研究室では、2016年度以降、学部研究会を専任教員である柳町功、高木丈也の2名体制で運営してきた。柳町功は「韓国・北朝鮮の政治・経済・社会」と題する研究会で主に社会科学分野を、高木丈也は「朝鮮の文化・社会」と題する研究会で主に人文社会分野の研究指導にあたっている。当然、分野横断型の研究を志向するSFCにあってこれらの分野はあくまで目安に過ぎず、実際には上記研究会の両方に参加する者、朝鮮語圏以外の研究会にも同時に所属して知見を深める者が多く在籍する。ここでは、これ

までに学生が取り組んだ研究の一例を示す。

柳町功研究会

「ロッテ財閥の発展と創業者・重光武雄」

「韓国社会における大統領特別赦免の意義と影響 ー大統領権力と財閥の関係を中心にー」

「NAVERのグローバル戦略と創業者・李海珍」

「CJ ENM ドラマ事業の現状分析および今後の戦略について ースタジオドラゴンを中心にー」

「KPOPの競争力と発展可能性 ー芸能事務所の役割と経営戦略を中心にー」

高木丈也研究会

「日韓におけるeSports文化の違い ー職業としてプログラマーを日本で浸透させるにはー」

「日韓のメディアから見るメンタルヘルスに対する認識の比較 ー自殺報道の仕方の比較とケアについてー」

「日韓の歴史認識問題 ーメディアと国民感情の関係性ー」

「在日コリアンのアイデンティティ形成について」

「韓国語ネイティブの類義の漢字語と固有語の使用」

上記の研究を行った学生たちの場合、一般に入学後に朝鮮語を学び始め、海外研修を経て、2年生、あるいは3年生の段階で研究会に入っている。つまり、1年生からインテンシブコースで朝鮮語を学習した場合、基本的な言語学習に約1年を費やせば(インテンシブ1+インテンシブ2+海外研修)、残りの3年間は他分野の知識も深めながら、コリアン・スタディーズ(地域研究)に没頭できることになる。

いずれの研究会においても「現場主義」が重視されることは言うまでもない。教員の指導のもと、学生は卒業プロジェクト(卒業論文)の完成に向けて、独自の調査・フィールドワークを展開する。ある学生は自身が幼少期から関わってきたボーイスカウトの日韓比較を、またある学生は自身が寝食を忘れて熱中している韓国ゲームの隆盛の要因を、といったように研究の入り口は自身の興味・関心に基づくものである場合が多いが、この段階になると、海外研修(2.1参照)や特別研究プロジェクト(2.2参照)におけるフィールドワークに比べ、より主体的かつ、独創性のある研究が展開されるようになる。また、学期中に週1回、定期的集まる研究会では、大学院生をも含めた先輩学生や留学生からのサポート体制が充実しており、「(個人研究をベースとしつつも)皆で研究を作り上げていく」という意識が強い。もはや多くの学生は、単に「卒業要件として論文を提出するため」ではなく、真に知的好奇心に駆り立て

られて、大学での学びの集大成としてコリアン・スタディーズを実践しているようにも感じる。SFCの学生の多様な興味や関心、知的好奇心に研究ツールとしての朝鮮語、そして地域研究の視座の3つが有機的に結合し、毎学期、多くの学生が魅力的な研究活動を展開している。

2.5.2 大学院研究会

学部での学びにとどまらず、大学院でさらなる探究を続けたいという声も少なくない。朝鮮語研究室では、このようなニーズを受け、2019年度からアカデミック・プロジェクト「コリアン・スタディーズ」を開設し、本格的な大学院教育の体制を整えた。これで学部の初年次教育としての言語学習から地域研究者の育成(博士号取得)までの一連の過程が整備されたことになる。本稿の執筆時点ではまだ博士号取得者の輩出には至っていないものの(執筆時点で3名が後期博士課程に在籍中)、修士論文を完成した学生は多い。当プロジェクトのメンバーがこれまでに提出した修士論文の題目の一例を示すと、下記のとおりである。

「日韓の多文化を背景に持つ子どもたちを対象にした言語支援策の比較研究 ―継承語の支援に焦点を合わせて」(2020年度)

「韓国財閥におけるオーナー経営者の支配継承 ―現代自動車グループを中心に―」(2021年度)

「Analysis of gender stereotypes and discrimination shown in the text book 〈Korean language with Marriage Immigrants〉」(2021年度)

「朝鮮民主主義人民共和国における情報通信技術の発展：金正日・金正恩時代の情報化政策を基礎として」(2022年度)
「スポーツ報道における「スター選手」の表象 ―バンクーバー五輪の女子フィギュアスケートをめぐる日韓の新聞記事比較―」(2022年度)

我々は、学部1・2年生が多く履修するインテンシブ1やベーシック1の段階からオリエンテーションにおいて、「研究会、大学院課程への進学(地域研究)を見据えての言語学習を」というアナウンスを行っている。また、折に触れて学部3・4年生や大学院生を授業に招聘し、最新の研究成果を披露してもらう機会も作っている。このように「言語を学ぶ目的」の意識化は、目標言語習得への大きなモチベーションになるばかりか、その周辺情報へのアクセスの機会をも増加させる。このように我々は言語教育の場において、地域研究との接点を可能な限り多く創出し、学生に刺激を与え続けている。

3. おわりに

本稿ではSFC朝鮮語研究室における言語教育と地域研究の実践について述べた。SFCの言語コミュニケーション科目の中に位置づけられるインテンシブコース(週4コマ)は、いわゆる専攻科目と第二外国語科目の中間に位置するものだといえるが、そうであるがゆえ、既存の枠組みに縛られない独自かつ独創的な運営が可能であるという強みがある。我々はSFCの多言語主義という大きな理念のもと、単なる知識の伝達や言語学習に留まらない多様なプログラムの開発にあたってきた。その最も大きな方向性は、兼若・柳町(2005, p.287)で示した「自由な発想」「諸課題に対応できる能力」「南北(中略)という視点」「日韓・日朝関係」「問題や課題を自ら見つける」といった思考方法・視座に基づいた学術活動(インプット、アウトプット)であるが、我々はそれらを時代に合った形で改良を重ね、カリキュラムの内部改訂を行ってきた。我々は言語学習を人間関係の構築や、情報収集、「現場」という最前線へのアクセスのために必要な方法を総体的に学ぶ場であると捉えている。高度な朝鮮語を媒介に人・世界と繋がるということ、さらには学生個人の多様な興味・関心、専門分野に言語を融合させるという試みは、SFCという分野横断を志向するキャンパスだからこそ可能な試みであり、実際に朝鮮語の原典に触れ、「現場」と関わることで、より深み・厚みのある、しなやかな思考が可能になることは、すでに多くの学生が証明している。

一方でこれを実現するために教員がすべきことも忘れてはならない。効率的な学習をサポートするためには、さらなるカリキュラムの改革が必要であろうし、学生のモチベーションの維持・向上のためには言語使用の楽しさを実感できる機会をより多く創出する努力も必要であろう。今後も時代の変化や学生のニーズにアンテナを張り巡らしつつ、利用可能なソースの有効活用、多様な分野との結合も視野に言語教育のさらなる充実・発展を目指していきたい。

付言

本稿は、高木・徐(2024)における発表内容の一部を参考にしつつ、それを大幅に加筆・修正し、記述したものである。

注

- 1) シラバスにおける当該科目の正式名称は「コリアンスタディーズ」であるが、本稿では便宜上「コリアン・スタディーズ」と表記することにする。

参考文献

大瀬留美子(2022)『ソウルおとなの社会見学』亜紀書房。
兼若逸之、柳町功(2005)「コンテンツ朝鮮語―その現状と課題」『外

- 国語教育のり・デザイナー慶應 SFC の現場から』慶應義塾大学出版会 . p.280-9.
- 慶應義塾大学 (2024) 『KEIO SFC GUIDE 2024』慶應義塾大学.
- 佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社.
- 菅原和孝編 (2006) 『フィールドワークへの挑戦—“実践”人類学入門』世界思想社.
- 高木丈也、金泰仁 (2020) 『ハンゲル ハンゲル I』朝日出版社.
- 高木丈也、柳町功、高在弼 (2023) 『2022 年度 学術交流支援資金 外国語電子教材作成支援 研究成果報告書』慶應義塾大学 SFC 研究所.
- 高木丈也、徐旻廷 (2024) 「学部インテンシブコースにおける朝鮮語教育」朝鮮語研究会 第 96 回例会 発表資料.
- 新原道信編 (2022) 『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房.
- 平田由紀江、山中千恵 (2019) 『ソウルを歩く：韓国文化研究はじめの一步』関西学院大学出版会.
- 吉村剛史 (2021) 『ソウル 25 区=東京 23 区』パブリブ.

[受付日 2024. 9. 16]